

日常災害に関する新聞記事調査及び 統計値との比較

日常災害 新聞記事 人口動態統計

正会員 中島 優*1
同 矢島 規雄*2
同 川村かおり*3
同 直井 英雄*4

研究目的

事故・災害に対する社会一般の認識は種々の情報によって形成されるものであろうが、その中で新聞記事による影響はテレビと並んでかなり大きいのではないかと考えられる。過去の研究¹⁾では新聞記事に取り上げられた各種の事故・災害の割合と統計にみられる事実との間にどの程度のずれがあるのか、その中でも日常災害が社会的にどの程度の問題と捉えられているかを認識する試みがなされた。本研究では最近の実態を調査するとともに過去の研究と比較する事によって、統計的な事実と報道のずれに関する経年的な変化をとらえ、研究上・設計実務上などの今後の対応を考える上での一資料にすることを目的とする。

研究方法

(1) 調査対象

過去の研究と比較するため、最近の5年間(1995.9~2000.8)の同じ新聞(朝日新聞)を対象とし、記事として取り上げられた各種の事故・災害等、特に日常災害については詳細に拾い出した。

(2) 調査項目

事故・災害の種類、発生年月日、被害者の年齢・性別とし、日常災害に関してはこれに加えて発生場所、起因物、傷害程度、傷害部位等も調査した。

(3) 比較方法

上記を集計し、それぞれ年度の近い人口動態統計の値と比較した。

研究結果及び考察

(1) 事故・災害の種類別割合の比較

表1は集計した記事の総数を統計値と共に示したもので、図1はその事故・災害の種類別割合を示したものである。まず大分類(交通事故・交通事故以外・外因その他)で見ると、最近・80年代共に統計より新聞記事の方が交通事故の割合が多く、外因その他の割合が少ないことがわかる。次に事故の種類別で見ると、交通事故の中では80年代に大事故のあった「航空機事故」を除くと、新聞記事・統計共に「自動車事故」が大部分を占めている。交通事故以外の中では、新聞記事の方が建築災害の割合が多いが、その大部分が非常災害で日常災害の割合は少ない。最近の集計で見ると日常災害の統計での割合は10%であるが、新聞記事では1.9%と他の事故と比較しても少ないことがわかる。外因その他の中では、統計で大部分を占めている「自殺」が新聞記事では少なく「他殺」が多いことから新聞記事に取り上げられやすいことがわかる。

表1 事故・災害による死亡者集計

	新聞記事 (1982.9 ~1987.8)		統計 (1984)		新聞記事 (1995.9 ~2000.8)		統計 (1997)	
	死亡者 (人)	割合 (%)	死亡者 (人)	割合 (%)	死亡者 (人)	割合 (%)	死亡者 (人)	割合 (%)
外 因 総 数	5556	100.0	57128	100.0	3828	100.0	65537	100.0
交 通 事 故	1796	32.3	13560	23.7	1098	28.7	13980	21.3
鉄 道	78	1.4	364	0.6	99	2.6	346	0.5
自 動 車	925	16.6	12213	21.4	868	22.7	12217	18.6
水 上 交 通	189	3.4	357	0.6	55	1.4	258	0.4
航 空 機	596	10.7	27	0.0	75	2.0	40	0.1
そ の 他	8	0.1	599	1.0	1	0.0	1119	1.7
交 通 事 故 以 外	1729	31.1	14993	26.2	1497	39.1	24905	38.0
労 働 災 害	289	5.2	1607	2.8	107	2.8	1146	1.7
建 築 災 害	964	17.4	5155	9.0	864	22.6	7603	11.6
日 常 災 害	128	2.3	4177	7.3	72	1.9	6551	10.0
非 常 災 害	836	15.0	978	1.7	792	20.7	1052	1.6
そ の 他	476	8.6	8231	14.4	526	13.7	16156	24.7
そ の 他	2031	36.6	28575	50.0	1233	32.2	26652	40.7
他 殺	907	16.3	1134	2.0	886	23.1	718	1.1
自 殺	1042	18.8	24344	42.6	290	7.6	23494	35.8
そ の 他	82	1.5	3097	5.4	57	1.5	2440	3.7

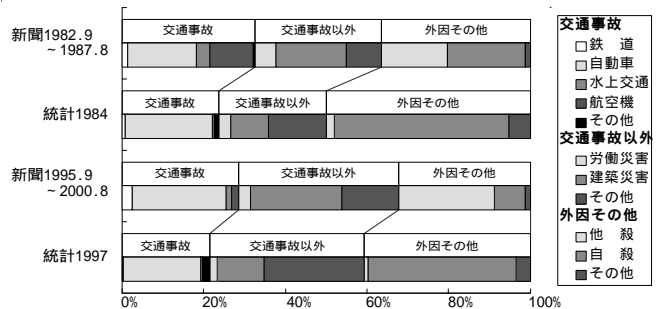


図1 事故・災害による死亡者割合

表2 日常災害による死亡者集計

	新聞報道 1965.1 ~1969.12 (人)	統計 1967 (人)	新聞報道 1982.9 ~1987.8 (人)	統計 1984 (人)	新聞報道 1995.9 ~2000.8 (人)	統計 1997 (人)
総 数	71	5643	128	4175	72	6552
中 毒	1	639	51	251	30	90
墜 落	33	882	31	760	12	1139
転 落	3	511	0	485	0	577
転 倒	2	745	1	993	1	1116
落下物・衝突等	19	109	16	84	11	50
感 電	0	34	0	16	0	5
溺 水	7	853	17	1132	6	3183
火 傷	2	1870	11	454	9	392
そ の 他	4		1		3	

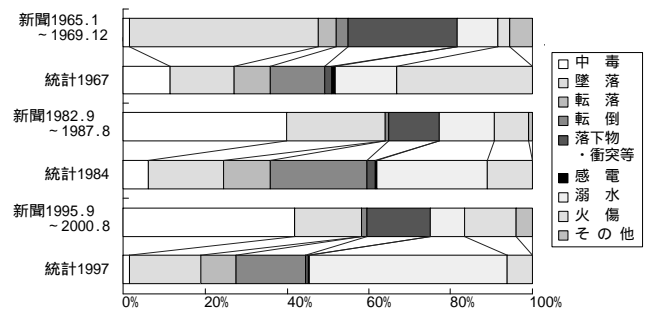


図2 日常災害による死亡者割合

(2) 日常災害の種類別割合の比較

表 2 は日常災害の死亡者数を統計値と共に示したもので、図 2 はその種類別割合を示したものである。60年代は統計での割合が多い「火傷」が新聞記事では少なく、新聞記事で「墜落」の占める割合が約半分と大きい。80年代と最近では、統計で非常に割合の少ない「中毒」が新聞記事では取り上げられやすいことがわかる。各年代を通して、統計での割合が小さい「落下物・衝突等」が新聞記事では取り上げられやすく、統計で割合の大きい「転倒」が新聞記事としては殆ど取り上げられないことがあげられる。また、統計上で年代を追うごとに割合が増えていて最近では日常災害の約半分を占める「溺水」が、新聞記事では割合が徐々に少なくなってきていることがわかる。

(3) 日常災害の発生建物用途別割合の比較

図 3 は日常災害の死亡者の発生建物別割合を示したものである。なお統計では発生場所の詳細な資料がないため、住宅と公共建築物とに区分した。統計上は各年代で住宅での事故が約8割を占めているのに対して、新聞記事では4~6割ぐらいにとどまっている。これは私的な住宅内の事故より公的な場所での事故の方が社会的に注目されやすく記事として扱われやすいからだと思われる。また新聞記事で学校の事故の割合が年代を追うごとに増えていることがわかる。

(4) 日常災害の被害者年齢別割合の比較

図 4 は日常災害の死亡者の年齢別割合を示したものである。統計上では各年代で65歳以上の割合がもっとも多いのに対して、新聞記事では年代を追うごとに増えているもののあまり扱われていない。また0~44歳の各年齢層では新聞記事の方が割合が多く、特に5~14歳の年齢層が注目されているのがわかる。これは若年層の事故の方がより衝撃的であるからだと思われる。

(5) 日常災害の傷害程度別割合の比較

表 3 は日常災害の傷害程度別件数を住宅における日常災害の傷害程度別推定値とともに示したものであり、図 5 はその傷害程度別割合を示したものである。推定値と比較すると、新聞記事では死亡・重傷といった重度の事故が多く取り上げられており、日常災害で99.6%を占める軽傷の大部分が記事には表れにくいことがわかる。

(6) 日常災害の男女別割合の比較

図 6 は調査した最新年度における日常災害の男女別割合を示したものである。事故の種類別で多少の偏りはあるものの、全体的に見て新聞記事・統計共に若干男性の事故の割合が多いことがわかる。

まとめ

本研究を通して各種の事故・災害は、新聞記事と統計との間にはかなりのずれがあることが確認できた。また、日常災害は過去と比較してさらに新聞記事に取り上げられにくく、人々に認識されにくい災害となっていることがわかった。

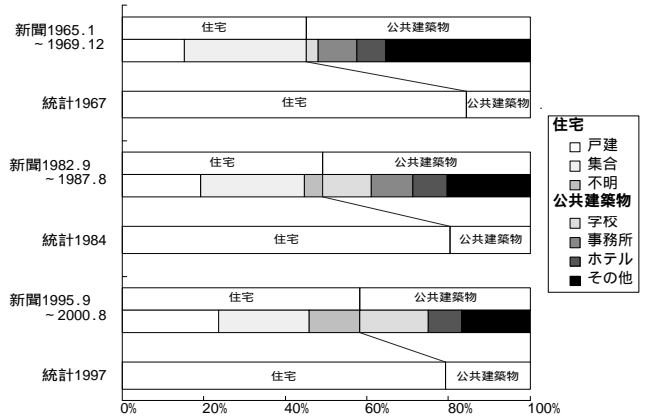


図 3 日常災害の発生建物用途別割合

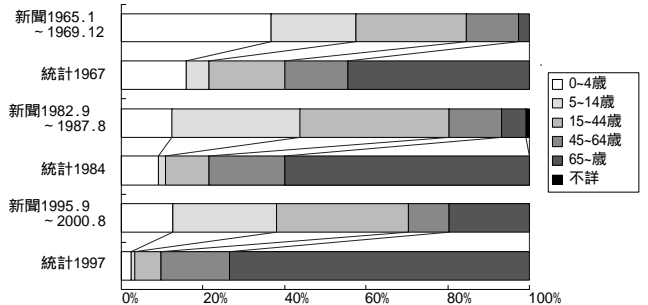


図 4 日常災害の被害者年齢別割合

表 3 日常災害の傷害程度別集計

	新聞記事 1965.1 ~1969.12 (人)	統計 1984 (人)	新聞記事 1982.9 ~1987.8 (人)	統計 1984 (人)	新聞記事 1995.9 ~2000.8 (人)	統計 1997 (人)	住宅における 日常災害の 推定値 (人/年)
合計	191	5644	287	4177	321	6522	46977872
死亡	72	5644	128	4177	72	6522	3633
重傷	48		45		78		175602
軽傷	71		114		171		46798637
不明					60		

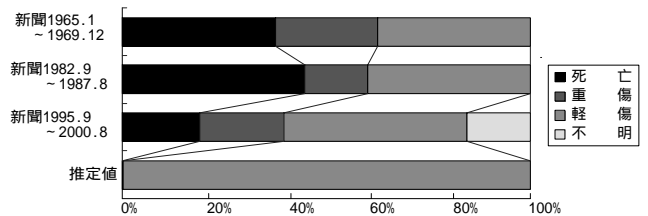


図 5 日常災害の傷害程度別割合と推定値との比較

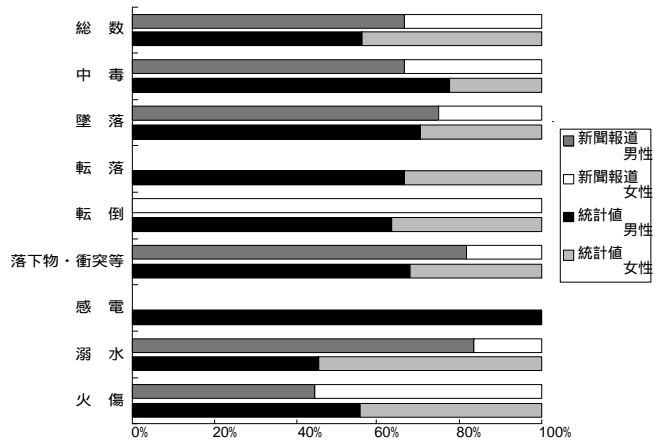


図 6 日常災害の男女別割合 (新聞 1995 ~ 2000 : 統計 1997)

参考文献 1) 「各種事故・災害に関する新聞記事調査および統計値との比較」
/日本建築学会大会学術講演梗概集 1989.10

* 1 東京理科大学大学院 Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo
* 2 同大学助手 Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo, M.Eng.
* 3 当時同大学助手 Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo, M.Eng.
* 4 同大学教授・工博 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo, Dr.Eng.